

要 約

報 告 番 号	① 乙 第	号	氏 名	北 畑 亮 輔
主 論 文 題 名				
Self-rated cognitive functions following chemotherapy in patients with breast cancer: a 6-month prospective study (化学療法後の乳がん患者における自己評価認知機能について：6ヶ月前向き研究)				
(内 容 の 要 旨)				
【背景】 乳癌に対する抗がん剤治療（以下、化学療法）後、患者の17%から75%に注意、記憶、学習、情報処理、遂行機能など認知機能において軽度から中程度の障害が生じるとされている。一方で、最近の縦断研究においては関連を否定する報告もあり、化学療法と認知機能障害との因果関係は明らかでない。これらの先行研究の問題点は、客観的な認知機能については詳細に評価しているが、主観的な認知機能について十分に評価していないことである。そこで、本研究では化学療法後の乳がん患者における主観的認知機能を中心に家族による評価や客観的認知機能との関係について調べた。				
【方法】 慶應義塾大学病院で化学療法を受けた乳癌患者に対し、化学療法直後（4週間以内）とその6ヶ月後に本人と家族による主観的認知機能を評価する縦断研究を行った。評価尺度は遂行機能においてDysexecutive Questionnaire（DEX）ならびにBehavioural Assessment of the Dysexecutive Syndrom（BADS）を、エピソード記憶においてEveryday Memory Checklist（EMC）ならびにThe Rivermead Behavioral Memory Test（RBMT）を用いた。本研究は上記施設の倫理委員会の承認を受けて実施した。				
【結果】 平成25年9月末時点で30名の患者を組み入れた（年齢 54.0 ± 10.0才；罹病期間 478.0 ± 1093.1日；ステージI 2名、II 20名、III 7名、IV 1名）。化学療法直後(4週間以内)において、本人評価における遂行機能とエピソード記憶はそれぞれ20.0%と6.7%が異常値を示した。一方、本人評価における注意機能については全ての参加者が正常範囲内であった。6ヶ月後、本人評価における遂行機能、QOL、ヘモグロビン値が改善を示したが、多重解析後に有意差を認めたのはヘモグロビン値だけであった。本人評価が悪かった群は、遂行機能とエピソード記憶においてそれぞれ50%、100%が正常化している。本人評価が異常値となった被験者はいなかった。本人評価による認知機能はお互いに相関を認めた。本人評価認知機能と家族評価認知機能とは相関を認めたが、多重解析後に有意差を認めたのはエピソード記憶における本人評価と家族評価だけであった。本人もしくは家族評価による認知機能は、客観的認知機能との相関を認めなかった。				
【結論】 本研究の結果は、乳がん患者において化学療法は18.9~20.0%で認知機能低下を引き起こす可能性があり、回復速度は機能によって差があると推測される。また、本人評価による認知機能は家族評価による認知機能と緩い相関はあるが、客観的認知機能とは相関を認めなかった。				